
トパーズ

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トパーズ

【Nコード】

N1298N

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

私は大学生。大好きな彼とトパーズを見たの。

彼はいつものバイトの駐車場整理に出かけていた。

今から思うと、そんなバイトが京都の木屋町にあったのが不思議だ。

飲みに来た人たちの車を預かるのだから。大半は飲酒運転で帰るのだ。

三十年も前の話。

「おい、この車頼むよ」

「はい」

「高いんだから大切に預かってくれよ」

「わかりました、社長。行ってらっしゃい」

「ああ」

彼は私立大学の四年生。あの頃はオイルショックでトイレットペーパーに主婦が群がっていた。だが、大学生の私たちは別に困ったことなどなかった。まとめ買いしなくても学生はどうってことないのだから。

上賀茂にある私たちの下宿は、それぞれが寮だった。彼は男子寮、私は女子寮。

ともに大家が離れていたから、みんな夜になると、あちらこちらから人が訪れていた。

私の寮は裏の住人が監視役でいたから、異性は真夜中の訪問になった。彼の方はどうってことなくいつでも入れていた。クラスが同じだった私たちは、いつからともなく話すようになり、付き合いももう四年目になった。

彼は優しい人で新しい服を着れば、よく似合うとほめ、可愛いを連発する人だった。私は自分でも美人でないことは分かっていたが、彼にそう言われるとそうかもしれないという気になった。

二人が北大路通りの宝石店の前でバスを待っている時、黄色のト

パーズが目に入った。私の誕生石。

「これ、値段の割には大きいなあ。彩の誕生石だろ、トパーズって」
私は大学生でもあり、指輪なんてファッショニングで上等だった。笑って頷くと、彼はしきりといいなあと言っていた。お互い部屋代込みの五万円仕送りをされてる中で、三万円の指輪のどことが安いのだと思っていた。それから、一週間後、彼はバイトを始めたのだ。夜のバイト。つまり、駐車場整理だった。

私は北大路の喫茶店でバイトをしていたが、時給は三〇〇円だった。彼は時給が六〇〇円。私たちはお互いごく普通のサラリーマン家庭に育ったものだから、バイトはささやかなレジャー費だった。食事はいつも自炊だったし、飲みに行くのは数えるほどだった。

私立大学はゴージャスな生活を送っている者もいれば、私たちのような庶民もいた。友だちはほとんど金持ちだったが、私の下宿に興味津々で、部屋は四畳半で共同のトイレと台所があり、風呂が無いというのはこじんまりどころか狭くて、それが珍しいようだった。「彩の下宿は落ち着くわ」

そう言っただけで泊まって、朝方まで飲み、歌い、ギターをかき鳴らしたものだ。流石に五人で寝た時は私は廊下に出ざるを得なかった。

一人、教職を取っていた私は、酔い潰れてる友達を起ささないようにそっと大学へ行った。それでも地元教員試験には落ちてしまい、臨時の教員になるしかなかった。父も母もとにかく卒業したら帰って来るのだと信じて疑わなかった。私自身、京都や大阪で住みたいとは思っていなかった。

彼は地元の公務員試験が受かって、ウキウキしていた。

「彩、結婚しようよ」

私は彼の言葉に頷いてはいたが、その重みはまだ理解していなかった。私も彼もまだ子供だったのだ。結婚は大人になって就職が決まればすぐできると思っただけだった。

それぞれの家風の違いがやがては大きな渦になることなど考えて

もいなかった。

付き合ったのだから結婚するとお互いに思っていた。

彼は夜のバイトを続けて、あの指輪を買った。ケータイが無い時代、彼は私の下宿の電話を鳴らした。

「彩、ちよつと出てきて」

私は銭湯に行ったばかりで、濡れた髪のまま出て行った。

彼は薄いセーターに、コール天のズボンを穿いて、いつもよりお洒落しているようだった。頭が寒くて震える私に、

「これ、はめてみて」

渡された小さな赤い箱。開けると、あのトパーズだった。

嬉しさと寒さで震えている私を抱き寄せながら、彼は震える唇で結婚しようかと、呟いた。

そして卒業式。私は母の手縫いのドレスを着た。みんなは振り袖を買っていた。彼から貰った指輪を初めて嵌めた。私は温かい幸せを感じていた。

だが、それからが大変だった。

初めて連れて行ってもらった彼の家では、とても歓待された。そして、学校の事務職員の試験があるから受けなさいと言われた。教員試験も落ちているし、何も考えずに受験に向かった。

嫁入りの品は披露することになってるから、そう言われて出されたのが持つてきなさいという道具の目録。車、ピアノ、嫁入りダンス三点セット、ドレッサー、下駄箱、着物は和ダンスに必ず入れてくること等等。そう、フランス人形まで書かれていた。

何かが、私の心に入りこんできた。

車って、運転ができないの？ ピアノ？ 弾けない上に持つてない。フランス人形なんて趣味じゃない。

彼の家ではそれがここの嫁入りの風習だからと、私が傷つくとは思っていない。悪意が無いから始末が悪い。でも、私にとっては、自分より道具？ 母を庇う彼を見て、また一つ心にひびが入った。

遠距離恋愛が始まって、たまに会うと嫁入りの道具が進んでいる

かどうかの確認。彼の方も私を迎えるにあたって離れの建築が始まっていた。結婚はお互いの家と家との結びつきなのか、段々恐怖心も湧いてきた。甘いデートなど消えていた。

まして、受けさせられた事務職員に合格したと言う通知が、さらに追い打ちを掛ける。結婚したい気持ち冷めていくのだ。彼は我が家にも何度となく足を運び、確かに優しい人で、父も母も人柄としてはとても気に入ってくれていた。だが、そう裕福でもない家庭の娘に、これほどの道具を持たせることに両親も違和感があった。

「彩、あなた、車を買って言うっても、結婚式の費用でも精いっぱいよ」

イヤというほど分かっていった。彼から来た結納金は箆笥がやっと買えるぐらいだった。車もピアノもあり得ない話だった。自分自身で貯めてきたお金は、着物やドレスサーを買って、後は披露宴に使うだけだった。どうやって無理な話だった。

私は三姉妹の末っ子。姉たちは昨年二人とも結婚したばかり。家に金などなかった。私は彼にそのことを何度となく話したが、彼はよくても両親は譲らなかつた。離れも建てたのだからと。

式が近づくにつれ、その心労に耐え切れず、私はついに彼に電話をした。別れを告げる電話。もう、式まで三カ月になっていた。分かっていたのか、両親は本当にいいのかと何度も尋ね、そして、結納を返しに行った。

私は彼と二人だけで甘い生活を送るのだと思っていた。だが、実際は違うのだ。彼も私も自分の主張も告げられず、説得するすべも知らず、親の庇護のもとにいたのだ。

声を押し殺して泣いたあの頃。

彼はそのまま去って行った。

そして、三年。

風の便りで彼が結婚したと言う話を聞いた。

私も職場恋愛で価値観が同じ人と結婚した。

銀婚式がやって来た。

「おい、ハワイのパンフレット貰って来たぞ」

今は夫婦二人になった。息子たちは独立し、夫は定年間近。

パスポートを探していると、筆筒の奥からコロンと転がり出た小箱。

あのトパースの指輪。

そっとはめてみるが、指の関節が太くなって入らない。

やっぱり結ばれる運命ではなかったのね。

苦笑いしながらも、ふと懐かしく思う。

「ほら、お前もビキニでも買うか？」

夫は金髪のビキニの美人が寝そべる浜辺の写真に釘付けになっている。

軽くつねって、こっちと指さす。

そこには寝そべるショーツだけの女性。

「ほほう、すごい！」

夫は笑いながら、息子たちにメールを送る。

『母さんがノーブラでハワイの海を泳ぐそうだ！』

息子たちの返信。

『ふーん、いいんじゃない』

『了解』

相手にされないメールを読んで、夫は呟く。

「やっぱり夫婦二人だな」

笑いながら、缶ビールを持ってきて渡す私。

次は金婚式かな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1298n/>

トパーズ

2010年10月8日13時20分発行